ばんえい競馬の現状と未来

Past present and the future of the Banei horse racing

1K10C218　進藤　雅大
主査 内田 直 先生　　副査 石井 昌幸 先生

【はじめに】

私は、よく競馬を観戦する。中央競馬を中心に様々な競馬を観戦していく中で、私の地元である帯広市で行われているばんえい競馬に興味を持った。

現在ばんえい競馬は、帯広市単独で開催している。ばんえい競馬の運営は大変厳しい状況に置かれている。しかし、　ばんえい競馬の存在価値というのは、地域経済への貢献だけではなく、北海道の開拓を支えてきたという歴史的、文化的価値がある。

本論文では、ばんえい競馬を継続的に開催するための展開方策について今までの取り組みなどに焦点を当てて考察していく。

【第１章】ばんえい競馬の歴史

ばんえい競馬は、競馬としての形ができあがる前は綱引きのように二頭の馬が互いに引き合う形で行われていた。

現在のようなそりに重りを乗せて行う方法になったのは、明治時代の終わり頃からだといわれている。

平成３年度には約３２３億円と過去最高の勝馬投票券発売額を記録した。この年を境にバブル経済崩壊などの影響を受け、勝馬投票券発売額が急激に減少し、収益率も大幅に悪化したことから、4 市での開催を廃止し、平成 19 年度から「ばんえい十勝」として帯広単独開催で再スタートを切った。

【第２章】ばんえい競馬の現状と課題

平成 19 年度から帯広単独開催となっており、単独開催の初年度こそは、１２９億３３９７万円と売り上げることができたが、それからは減少傾向が続いていた。しかし、平成２４年度では、単独開催が開始されて６年目にして初の前年比を上回る売り上げを上げることに成功した。

入場者数は、単独開催となってから年々増加傾向にあり、平成２４年度に２５万人を突破したことから見ても、本馬場入場者数は増加している。しかしながら、本場での売上を伸ばすことができないのが現状である。

【第３章】これまでの取り組み

ばんえい競馬では、継続開催するために様々な取り組みを行っている。

販売額増加への取り組みや様々なファンサービス向上策や積極的な広報活動に加え、映画やテレビドラマなどをはじめとする各種メディアでも数多く取り上げられたことから、ばんえい競馬は全国的に注目度を増している。

入場人員数も、「とかちむら」オープンを機に増加し、また、旅行会社の団体ツアーなどの観光客や北海道内外の修学旅行生が多数帯広競馬場を訪れるなど、地域の重要な観光拠点として定着してきている。

【第４章】ばんえい競馬の果たしている役割

公営競技としての競馬は、「その行う競馬の収益をもって、畜産の振興、社会福祉の増進、医療の普及、教育文化の発展、スポーツの振興及び災害の復旧のための施策を行うのに必要な経費の財源に充てるよう努める」こととされている。ばんえい競馬においても直接的にもたらす収益のほか、地域経済への貢献や観光資源、畜産振興としての側面など、ばんえい競馬は地域振興に大きな役割を果たしている。

【第５章】ばんえい競馬の展開方策

収入の増加・確保策、本場入場者の増加策、農用馬の生産復興及び競走馬確保策、運営手法の見直しなど様々な角度からばんえい競馬の継続開催のための展開方策を考察する。一番の懸念材料は、運営方法にあると考えられる。現在の委託方式の運営方法では、将来のための再投資の財源を確保が難しいからである。なぜなら、現在のばんえい競馬運営の体制では、馬券発売収入から必要な経費を差し引いた金額を業務委託料とすることにより、受託業務で生じた損失や余剰は、受託企業が吸収する仕組みとなっている。この運営体制の改善が急務であると考える。これに加え、様々な展開方策が必要と考える。

【おわりに】

帯広市は、「世界で唯一のばんえい競馬を無くしてしまうことは、帯広・十勝にとって、大きな損失と考えます。」と述べている。では、本当にそうなのだろうか。私は、大きな損失になり得ると考える。ばんえい競馬は、馬文化の伝承、観光資源への可能性、地域経済への貢献、農用馬生産への寄与など様々な役割を担っている。様々な取り組みの末、平成２４年度では、ばんえい競馬で初めて売上が前年比で上回ることに成功をすることができた。これを契機にばんえい競馬がより一層盛り上がりを見せることを期待したい。